

No.11  
2002.2.22

# いしかわの遺跡

## 古代体験ひろば 収穫まつり



2001年10月27日、秋晴れのもと古代体験ひろば収穫まつりを実施しました。サトイモ・米の収穫、アワ・ヒエなどの脱穀、石皿・石臼を使った製粉、土器による製塩、古代米炊飯、アワやキビの餅つき、縄文鍋の試食、復元した古代の食卓や農園の一年を記録した展示など、古代の食をテーマにしたこれらの体験や見学を通じて、古代人の苦勞や工夫、そして何よりも収穫のよろこびを感じていただけたものと考えています。

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1  
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731  
E-mail mail@ishikawa-maibun.or.jp  
ホームページ <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

## 平成13年度発掘調査から

# 加茂遺跡

加茂遺跡は、金沢市の北に位置する津幡町の加茂・舟橋地内にあります。発掘調査は1991年度に始まり、今年度は第7次の調査でした。昨年度は、古代のお触れ書きと言われる「加賀郡勝示札」が出土し、全国的に有名になりました。また、これまでに古代北陸道や大型の建物、井戸なども発見しており、加茂遺跡が駅家や関であった可能性も考えられます。

今年度の調査では、加茂遺跡で初めて弥生時代中期の建物跡が見つかりました。また、古代の建物跡の広がり調査区の中でとぎれ、その東側には、古代から中世の水田跡が広がっていることもわかりました。

出土した主な遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・木製品などです。また、磨製石鎌・木製のはしご・和同開珎・漆紙文書（文字の書かれている漆がしみこんだ紙）なども出土しました。和同開珎は、堀立柱建物の柱穴から出土しており、建物を建てる際、地鎮のために埋められたまじないであると考えられています。また、漆紙文書には、人名と思われる「公 万呂」や「天長九年本」「承和貳」などの年紀や、お米などの数量と思われる「石一斗」などの文字が書かれていました。



調査区の航空写真です。



ていねいに掘っていきます。



木製のはしごが出土しました。



弥生時代中期の建物跡です。

## 東的場タケノハナ遺跡

東的場タケノハナ遺跡は、邑知潟から日本海へ流れる羽咋川の左岸、子浦川と合流する地点からやや上流側の微高地に位置しており、弥生時代後期を中心とした集落遺跡であると考えられます。

調査区の南部と北部でそれぞれ溝を確認しました。この南北の溝に挟まれた区域では、竪穴系の建物15棟以上、掘立柱建物3棟以上を検出しています。いわゆる環濠集落です。この集落跡の南側は低湿地が広がっており、稲作が行われていたと考えます。このほかに、布掘建物や骨片が出土した土坑など弥生時代中期の遺構を検出しました。

本遺跡は、弥生時代の遺跡として著名な吉崎・次場遺跡とはわずか300mしか離れておらず、羽咋地域における弥生時代の集落を考察する上で重要な遺跡であるといえます。



遺跡上空から邑知潟方向を望む。すぐ近くに吉崎・次場弥生公園も見えます。



作業風景、40人近い人たちに協力してもらいました。



穴がたくさんあって、どれが建物の柱穴になるのか、頭を悩ませます。



骨片が出土した土坑、どういう性格のものでしょうか。

# 「古代北陸道に掲げられたお触れ書き」

## - 加賀郡勝示札から平安時代を考える -

日時：平成13年11月17日(土)  
会場：石川県文教会館 大ホール

平成12年6月に石川県津幡町加茂遺跡から出土した加賀郡勝示札は、古代律令国家の情報伝達や勸農政策のあり方を具体的に示す希有の資料であり、9世紀中頃（平安時代前期）の社会状況を生々しく伝える第一級の資料として全国的に大きな注目を集めてきました。（財）石川県埋蔵文化財センターは石川県教育委員会と共催で、加賀郡勝示札や加茂遺跡について、県民のみなさんにいっそうの理解を深めていただくためにシンポジウムを開催しました。



永井路子先生

当日は雨模様であいにくの天気でしたが、650人を超えるみなさんにお集まりいただき会場は超満員になりました。谷本正憲石川県知事のあいさつに続いて、作家の永井路子先生に「加賀郡勝示札に見る古代の人々」と題して、加賀郡勝示札の背景にある古代の人々の暮らしなどについてご講演をいただきました。その後、加賀郡勝示札の内容や加茂遺跡と古代北陸道、中国の勸農政策や命令伝達方法との比較など多角的な構成で各先生による報告が行われました。

報告の後に、橋本澄夫金沢学院大学教授の司会で、報告された先生方と共に当センター理事の大友恵利子さんにもコメンテーターとして加わっていただいて、加賀郡勝示札の内容や加茂遺跡と古代の北陸道の関係などについて熱心な討論が行われました。

今回のシンポジウムにより、加賀郡勝示札が平安時代前期の社会を知ることができるだけでなく、文書構成や情報伝達のあり方が中国漢代にまで起源が遡る可能性が出てきており、日本古代史のみならず東アジア古代史の研究にとって重要な資料であることがあきらかとなりました。また、加賀郡勝示札を出土した加茂遺跡が古代北陸道の分岐点に位置しており深見駅家に該当する可能性が十分にあるなど、加茂遺跡の重要性が再確認されると共に今後の調査の進展が期待されました。



シンポジウムのようす

加茂遺跡では、（財）石川県埋蔵文化財センターが県の委託を受けて実施している国道8号線津幡北バイパスの建設工事に伴う発掘調査が平成15年度まで続き、また、平成13年度からは津幡町が国と県の補助を得て加茂遺跡の範囲や性格を確認する調査をはじめております。今回のシンポジウムが、これから加賀郡勝示札や加茂遺跡の調査と保存活用を考えていく上で大きな成果をあげることができたのではないかと考えております。



会場のようす



復元品を見る参加者

# 城下町フォーラム 再発見！城下町金沢

- まちなみと暮らし -

日時:平成13年10月21日(日)  
会場:金沢市観光会館 大集会室

城下町フォーラムは、文献・考古・建築など諸学の研究者が集い、専門領域を越えた学際的な総合研究を目指し活動してきた「金沢城・城下町学際研究プロジェクト」と、当埋文センターの主催で行われました。

基調講演では、日本工業大学の波多野純さんが「金沢・京都・江戸の町屋と都市景観」と題して、金沢の町屋の特質と形成過程について発表されました。金沢の町屋は、京都のそのの影響を受けて発達したと言われていますが、京都や江戸の町屋では早い時期から普及する瓦葺きが金沢の町屋では普及せず、板葺き石置き屋根が続くことなど、これから検討すべき事象もあるということです。

続いて、4つの研究報告がなされました。文献史料、古絵図からのアプローチでは、「延宝古絵図にみる町づくり」について木越隆三さん、竹松幸香さんが発表されました。埋蔵文化財の発掘調査からは、「発掘された武家屋敷と町屋」の



講演される波多野純先生



増田達男先生

遺構について楠正勝さんが、「出土品が語る暮らしぶり」について増山仁さんが発表されました。次に、金沢工業大学の増田達男さんが「CGで甦る城下町」として、現在進めておられる、城下町金沢をコンピュータ・グラフィックスで再現する作業の途中成果を披露されました。また、江戸時代の面影をとどめている、現存する建造物を紹介されました。最後に、吉岡康暢さんをコーディネーターとするフォーラム「城下町金沢を考える」では、発表者の意見交換や質疑応答がなされました。

当日は200人の方々が参加され、皆さん熱心に聴いておられました。質問も多く、関心の高さがうかがわれました。この城下町フォーラムを通して、様々な歴史的都市景観に恵まれた金沢を再認識することができました。



CGで再現された城下町金沢(金沢工業大学提供)



フォーラムのようす

# 平成13年度 話題の遺跡講座

日時:平成13年11月4日(日)  
会場:石川県立社会教育センター

## 中世のまじなひと人々

奈良大学教授 水野 正好

人々は自分の幸せを願うため占いを信じたり縁起をかついだりします。昔の人々も今と同じように占いやまじないを行っていたようで、遺跡からはそれに関わる遺物が見つかっています。水野先生は中世におけるまじないについて発表されました。



熱弁をふるう水野先生



病を抑えるまじない札

先生のお話によると、当時は、出産、子供の夜泣き、異性に対する愛情、家の建築、果ては虫歯の治療まで人生のありとあらゆることにまじない行為をしていたようです。特に病や穢れなどは疫病神である「鬼」の仕業とされ、その鬼を鎮めるために木簡をはじめとするまじない札が使われました。このまじない札が全国各地から見つかっているのです。

県内で見つかったまじない木簡は数例あり、そのほとんどは病気や穢れが立ち去るように願う内容です。平成12年度に大町ゴンジョガリ遺跡で出土したまじない木簡も同じ意味と思われますが、これまでに見たことのない文字が書かれており、細かい内容についてはもう少し検討が必要ということです。このようなまじないに関わる遺物は数量が少ないうえ、その意味を解読することは極めて困難なことなのです。

水野先生は、難解であるまじないの遺物について判りやすく説明して下さい、まじないがどのような意味をもつのか考えることができました。また、出土した遺物から当時の人々の願いや思いを垣間見ることができました。

## 発掘された呪符木簡

(財)石川県埋蔵文化財センター 田村 昌宏



緊張感ただよ田村主事

平成12年度発掘調査した羽咋市大町ゴンジョガリ遺跡出土の呪符(まじない)木簡についてお話ししました。大町ゴンジョガリ遺跡は室町時代の村の跡で、掘立柱建物や井戸などを検出しました。木簡は土坑や井戸から4点も見つかり、ひとつの遺跡からこれだけまとまって出土することは非常に珍しいことです。報告ではスライドを使って遺跡の説明の他、県内でこれまで見つかったまじないの遺物を紹介しました。



呪符(まじない)木簡

当日は100人の方々に参加いただきました。水野先生の軽快で楽しいお話に参加者全員熱心に聞き入り、誰も途中で席を立つことがありませんでした。これも水野先生によるまじないの威力なのかも…。

# スクスクと育ちました

## - 古代体験ひろば体験農園の一年 -

古代体験ひろばに体験農園があることをご存じですか？

この農園は、いろいろな農耕体験や実験を通して、古代人の食生活やワザを総合的に学ぶためにつくられました。今年、縄文時代の栽培が考えられるアワやヒエ、今も白山ろくの畑で作られるシコクビエ（カマシ）、タカキビなどを栽培しました。5月にまいた作物たちはスクスクと成長を続け、9月中旬に収穫の秋を迎えています。

普段は見る機会が少ない作物たちの一年をのぞいてみましょう。

### 種まき



5月3日のオープニングで種をまきました。貫頭衣を着て、気分は古代人。ちなみに、発掘調査での畝の確認例は弥生時代後期以降です。

### 発芽

ヒエ。約1週間後に確認



### 成長中



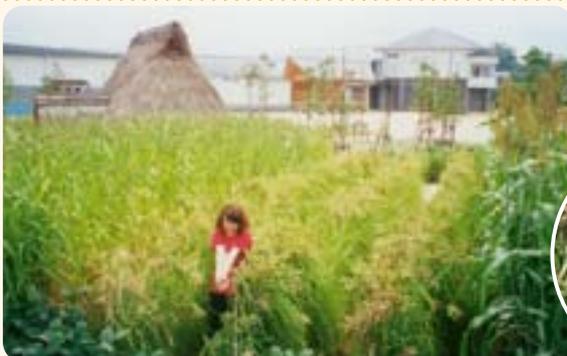
6月14日の様子です。苗の間引き、除草、水やり、土寄せなどが続きます。さて古代人は？

はいポーズ



7月25日の様子です。梅雨入り後、急速に緑が濃くなり農園らしくなりました。写真手前よりイナキビ、タカキビ、シコクビエです。

### 穂がでた



8月はじめまでに、一斉に穂がそろいました。夏の強い日差しの中、穂には小さな花が。アワ、ヒエ、タカキビは約2.5mの高さにスクスクと成長。8月末には、写真のように黄金色に色付きはじめました。そろそろかな？

カマシ(鴨足)  
鴨の足に似ているので、この名前が。



### 収穫です



8月末から9月中旬にかけて、ヒエから順に、収穫の秋を迎えました。収穫は、穂の実りがそろわないため、弥生時代のように数回石包丁や木包丁を使って穂摘みをしています。中学生たちもイナキビの収穫体験中。摘んだ穂は、天日干しのあと、収穫まつりで脱穀や精白の体験をしています。

## 訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

### かみやま だ 上山田貝塚 (国指定史跡)

宇ノ気町字上山田小字和田集落背後の通称「たち山」という、東西約250m、南北約80m、標高約20mの独立した丘陵上に上山田貝塚があります。

昭和5年(1930)宇ノ気町字指江の医師久保清氏によって石川県下で最初に発見・発掘された縄文時代中期の貝塚です。丘陵の東先端に近い、くびれ部の北側と南側の斜面に、最大約150cmの貝層が残されていました。鹹水産の貝類も少量混じりますが、イシガイ・オオタニシなどの淡水産貝類とフナなどの魚骨が圧倒的に多い主淡水貝塚です。石器・骨角器・獣骨などの遺物も豊富で、当時の生活、気候、地形などを知る上で貴重な遺跡です。また、この遺跡より出土した縄文土器は、北陸地方の同時代中期中葉の標識土器として「上山田式土器」と命名されました。



丘陵の上り口に設置された石碑



貝層を取り巻くように植栽されている南貝塚

上山田貝塚の発掘調査からわかったことは、かつて日本海の一部であった河北潟が、この頃には誕生していたということです。貝塚の西側に広がる沖積地もまだわずかで、河北潟が目前までせまっていた様子が目に浮かぶようです。そして内灘砂丘から続く河北の砂丘も、現在ほど砂が堆積しておらず、日本海の波が眺望できたのではないのでしょうか。このようなことを考えながら、当時の暮らしに思いをはせるのもまた楽しいものではないのでしょうか。



平坦な丘陵の上(写真左奥に貝塚)

#### 上山田貝塚

時代	縄文時代中期
所在地	河北郡宇ノ気町字上山田 (宇ノ気町管理)
交通	JR宇ノ気駅下車 南に徒歩約20分 国道159号 狩鹿野南交差点を東に約3分
問合せ	宇ノ気町教育委員会 生涯学習課 電話 076-283-0057

